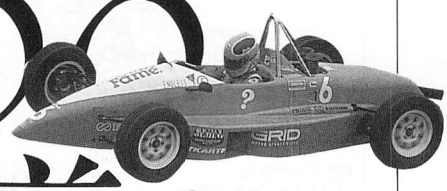
FJ1600 アグレッシブ前へ



DELECTION SHUHEI NISHIZAKI
TEXT by AKIHIRO KOMIYAMA
PHOTO by SADAHO NAITŌ

「まだ誰もいないけど、既に戦い（決勝レース）は始まってるんですよ、このパドックでは。誰もいなくても、もうレーサーたちの気合いで一杯なんです。」

決勝レース当日午前7時。パドックゲートがオープンされる。これから始まる激しいバトルのために、力を温存しているかのような静寂の中、張り詰めたムードがパドックに漂っている。輝く陽光が辺りを照らしはじめ、まるで戦いの時が徐々に近づくことを知らせるように、刻々と光度を増していく。

水野のよりも一足先にパドックでマシンの傍らに立つ男がいた。

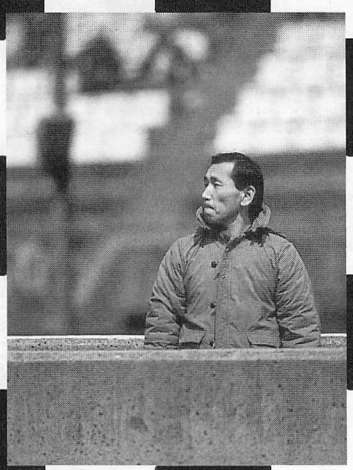
多（おおの）　幸一。

水野がチームエントリーしている、ピーカーブレーシングのチーフディレクターであり、レーサー・水野昇太のディレクターである。

「引き分けっていうのが嫌いな性分なんですよ、僕は。ハッキリしないことが、今の世の中は多すぎる。だけど、カーレースはそれがないんですよ。当たり前かもしれないけど勝つか、負けるか、このどちらかしかないんです。努力を積み重ねた答えが勝ち・負けとしてハッキリと形で表れる。中途半端が全くない、そこがいいんですよ。それがカーレースの魅力ですね。」

多はFJに関わる以前から、数々のカートレーサーを育て上げた実績を持つ。そしてさらなるカーレースの魅力を求めて、FJに焦点を絞り始めたとき、同じ焦点を描いていたカートレーサー（当時）水野昇太と出会ったのである。

現在ディレクターという肩書を持つ、



多だが、実は一般に認識されている監督とは、その意味合いが少し異なる。

たとえば、カテゴリーがF3000などのレーシングチームならば、レーサーやメカニック、そして様々なスタッフ総てが、一つのチームに在籍するシステムなので、それを統括するポジションをチーフディレクターと呼ぶ。これが一般にいう監督である。

本来、こういったスタイルがカーレースを行うベストのシステムなのだが、このシステムをとるためには必要不可欠な条件がある。それはレースに必要な資金援助をしてくれる安定したスポンサーを持つこと。最高峰のF1のレーシングチームはもちろんのこと、カテゴリーがトップに近いチームは、ほとんどが安定スポンサーを持ち、このシステムが万全にとられている。

だがFJの場合、このシステムがとれているレーシングチームは稀である。稀というよりも、レーシングチームより個人でエントリーしているレーサーのほうが多いというのが、現状である。

つまり、400万円近いマシンの購入費から、部品、交通費などあらゆるレースにかかるお金を自己負担しながら、参戦しているレーサーのほうが、FJには多いのである。

平日は一般人と同じように、ほとんどのFJレーサーは地道に働き、できるだけ金銭的節約をしてレースに出場する資金を作り出す。そして、レースの開催日近くになると、そのなけなしの資金全てを走ることのために注ぎ込む。

華やかなバトルが繰り返されるFJ

水野昇太選手を応援して下さるスポンサーを募集しています。

お問い合わせ先
PEEK-A-BOO RACING
〒604 京都市中京区竹屋町東洞院西入三本木5-464-1
TEL (075)255-6202

だが、ある意味ではこのレーサーたちのハングリーさが、緊迫したレース展開を生み出しているのかもしれない。

もちろん、水野もこの例外ではなく、平日は勤務先のジェミニカートで働き、レースの資金を作り出している。

そんな資金面のスポンサー探しから、レーススケジュールのマネージメント、そして最も重要なメンタル面のフォローなど、水野の様々なソフト面をサポートしているのが、多である。

「ハードというかマシンのメカニック部分は、マシンを購入した東京R&Dに助けてもらってますけど、ソフトというか精神的な部分はかなり多さんにフォローしてもらってます。特に仕事でなかなかいけない、スポンサー探しとか。普段はこれといった話しは余りしないんですけど、いてくれるだけで落ち着くんですよね。多さんは。」

マシンに乗る水野と常に傍らにいる、多の姿は、リングで戦うボクサーとそれをコーナーサイドで見つめるセコンドに似ている。

水野は自分の大きな夢を掴むためサーキットを走る。多もまたレーサー・水野に自分の大きな夢を乗せてサーキットを走っているのである。

有志はいるが、まだ資金協力者がいない水野をフォローしてスポンサー探しをする一方、できるだけレースのしやすい環境づくりをするのが多である。

だから多は、一般でいうディレクターとは違う。しいていうなら、戦う水野のセコンドというべきだろう。

「昨年の前半は、まずFJになれるための研究に専念。そして後半がスムーズにレースを行える、基本のシステム作りに専念、といった感じでしたね。だけど昨年のうちにその基本が固められたんで、今年はカタチになってますから、はじめからレースに勝つ流れをつくることだけに専念できるんです。それと水野自身が昨年の経験が自信となって、身についてきてるからこそ、いい結果がでているんでしょう。」

どうすれば水野がベストの状態でアグレッシブに走れるか。そのことを常に頭に置いて、多は勝つためのレース前の流れをつくり出す。

そして、その多のつくり出す勝つための流れを、水野はここまでレースごとに確実にモノにしている。

3月7日にT-英田で行われた、N1耐久ラウンドシリーズ ツーリングカーレース500km第一戦にも、水野は優勝を果たし、3連勝を飾った。

「昨年までは、ただ完走が目標でしたね。初めてのことが多かったから。だけど、今年はマシンなどのハード面でも、レース前の流れのソフト面でも、どうしたら勝てるかわかったので、水野がベストで乗れれば、いつだって狙える体制が整ったといってもいいでしょう。水野もレーサーとして昨年より数段精神的にたくましくなってきたし、何かないかぎり、いつも狙いますよ。」

多がこう語るように、水野はここまで順風満帆であった。しかし、レースは生きモノ。ちょっとしたことで、その流れは、簡単に揺るがされてしまう。

（つづく）